

# 2014年の音楽は スイスに注目しよう！

新年を迎えて、今年の《音楽》のハイライトはなにか？となると、いろいろあつて絞るのがなかなか難しいところですが、普段、大きく取り上げられることの少ない、国交樹立150年の節目を迎えるスイスの音楽について注目したいと思います。今回は、日本とスイスの文化面での交流に尽力されるチュールヒ在住のジャーナリスト、中東生（なかしのぶ）さんに、『音楽の旅』記念ツアー「春のスイス音楽紀行」と、スイスの音楽事情について寄稿いただきました。

## 音楽大国スイスへようこそ！

今から丁度150年前の1864年2月、日瑞修好通商条約が締結された。それは、前年4月に横浜に到着したスイス通商使節団が、困難を極めた幕府との条約交渉を粘り強く押し進めた末にやっと手に入れたものであった。その150年後のメモリアルイヤーにスイスを訪れることは、通商使節団が築いた架け橋をより強固にするようで、深い意義が感じられる。今年は特に、一人でも多くの日本人にスイスへ旅して頂きたいと願わずにはられない。

そんな時に「春のスイス音楽紀行」の企画を目にした。150年前のスイス通商使節団も、自国がこれほど音楽大国になるとは思っていなかったかもしれない。天然資源に乏しく、小さな国土の中になお、多くの山岳地帯を抱えるスイスは、雇われ兵隊として外国のために戦争をした歴史に幕を降ろそうと、紡績工業でやっと国力を得初め、療養を含む観光大

国として発展していった。世界中の富裕層がスイスを訪れるようになると、耳の肥えた彼らが保養地でも一流の音楽を要求し始める。そしてまた、永世中立国のスイスには世界的著名な音楽家達が移住してくるようになり、スイスは遅まきながら音楽大国として成長してきたのである。それに遅れて日本も、戦後「アジアのスイスを目指せ」と謳われたように、経済大国の仲間入りを果たし、現在は、高い水準の音楽を解する国として世界の音楽家達に一目置かれる存在になった。

スイスは独語圏、仏語圏、伊語圏、ロマンシュ語圏の山岳地帯に四分割されているが、ローザンヌはその仏語圏で、ジュネーヴに継ぐ重要な街だ。国際オリンピック委員会本部があり、その博物館なども必見だ。また、ベジャールに代表されるバレエのメッカでもあり、国際バレエコンクールが開催される都市として世界中から注目を集めている。



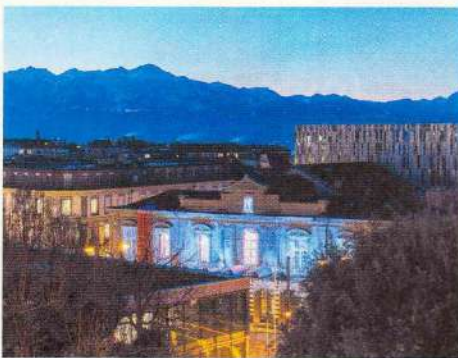
ローザンヌ歌劇場公演「セヴィリアの理髪師」から  
写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場外観 写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場外観  
写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場外観  
写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場公演「セヴィリアの理髪師」から  
写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場公演「セヴィリアの理髪師」から  
写真提供: Marc Vanappelghem



ローザンヌ歌劇場の前身となる「ゾルジェット劇場」は、1918年にストラヴィンスキーの舞台作品『兵士の物語』が初演されたことで世界的に名を馳せた。その後も、レマン湖に面した景勝地にあるハイレベルな歌劇場として独自の発展を遂げている。

そんなローザンヌ劇場は2008年に、視覚的にも音楽的にも美しい『カルメン』を携えて初来日しており、今回のツアーに組まれている「セヴィリアの理髪師」も、同様に見応えのある舞台になるであろう。また、長い工事期間を経て2012年に蘇った劇場は、伝統とモダンを上手に調和させており、一見の価値がある。

バーゼルは独語圏に含まれるが、ドイツとフランスとスイスが交わる地点にあるため、昔から国際色豊かな街で、文化的レベルの高い大都市として栄えていた。その地で最も由緒あるバーゼル交響楽団は「一番月給の高い楽団員」と噂される。バーゼル市民は、芸術に費やすお金の一人当たりの平均額が、スイスで一番高いといわれている。そんなバーゼルの聴衆に涙を流させた辻井伸行氏が、バーゼル交響楽団と3度目の共演を果たす。視覚を越えた魂のレベルでの日瑞交流を体感できるのは格別の楽しみです。

チューリヒは独語圏のみならず、スイスの経済的首都と言え、そこに君臨するトーンハレは外観こそ質素だが、その透明な響きと優雅な内装で昔から愛されていた。トーンハレ管弦楽団は頻りに日本ツアーを行っており、2014年4月にも来日予定だが、彼らの持つ音色を一番堪能できるのは、やはりトーンハレで行われる演奏会だ。日本ツアー直後の成長期に、楽団員達に敬愛されている客演指揮者ドホナーニの指揮で彼らの演奏会を聴けるとは恰好の機会だ。

そしてこのツアーのハイライトは、チューリヒ歌

劇場の『アンドレア・シェニエ』だろう。1100席強という大きさではあるが、世界的レベルを誇っているこのオペラハウスで、55年指揮し続けているサントイは、2013年11月にチューリッヒ市文化賞を受賞したばかりだ。彼の振る『アンドレア・シェニエ』は、2007年にプレミエ上演された。その時の題名役はサルヴァトーレ・リチートラだったが、2011年8月不慮の事故で帰らぬ人となってしまった。オペラ界全体に大きな打撃を与えた彼の死を乗り越え、ようやく再演されるこの演目は、チューリヒのオペラファンの期待の的となっている。

こうして駆け足ではあるが、スイスとその音楽事情を身体を隔々まで染み込ませて日本に帰国すれば、きっと150年目の親瑞大使として、日本にスイスへの友情の種を蒔いて下さるに違いない。これこそ、有意義な旅の在り方かもしれない。

中 東生（なか・しのぶ）



チューリヒ歌劇場公演『アンドレア・シェニエ』から  
写真提供: Suzanne Schwiertz



チューリヒ歌劇場公演  
『アンドレア・シェニエ』から  
写真提供: Suzanne Schwiertz



チューリヒ歌劇場公演『アンドレア・シェニエ』から  
写真提供: Suzanne Schwiertz



チューリヒ歌劇場内観  
写真提供: Suzanne Schwiertz



チューリヒ歌劇場外観 写真提供: Suzanne Schwiertz

## 中 東生 - なか・しのぶ



グローバルプレス会員ジャーナリスト。東京芸術大学卒業。音楽専門誌、公演プログラム、ウェブマガジン等に寄稿するかたわら、舞台通訳等もこなす。日瑞文化交流企画に力を入れ、2013年6月に初来日し、大好評をとったバーゼル歌劇場の日本公演には、発案者としてスタートから尽力した。